



TITLE:

ニホンザルの行動力と社会性(III 共同利用研究 2 研究成果)

AUTHOR(S):

鈴木, 延夫; 浅野, 俊夫

CITATION:

鈴木, 延夫 ...[et al]. ニホンザルの行動力と社会性(III 共同利用研究 2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 80-80

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160426>

RIGHT:

ニホンザルの行動力と社会性*

鈴木 延 夫 (北大・文・心理)

浅野 俊 夫 (霊 長 研)

* ニホンザルの索引力及び跳躍力テスト 第15回プリマテス研究会 (1971) ニホンザルのボール引き行動におけるダイナミクス 第31回動物心理学会 (1971) 日本ザルの行動力の測定 (単独での行動力と集団内での行動力との関連について) 第31回動物心理学会 (1971)

集団における個体の行動様式を決定している要因の一つに、各個体レベルでの行動力を考え、この行動力における個性と集団場面での社会性との関連についての分析を試みた。個体レベルでの行動力測定の測度として、ジャンピングテストとボール引きテストを行なった。このようなテストを体力テストと呼ばず、なぜ行動力テストと呼ぶかという、このようなテスト場面における個体の行動は単に体力あるいは運動力だけで決定されるものではなく、フィジカルな運動力を如何にうまく駆使してその場面を乗り切っていくかという、よりソフトな面での能力との相互作用の結果が成績にあらわれてくると考えるからである。被験体としては高崎山群、オス5頭、(S-6: 6~8才, S-101, S-6, S-64, S-78: 8才以上)を使用した。

集団における社会性については、2個体及び3個体対面テスト、エサ場における位置の測定を行なった。どのテストでも S-64の1位と、S-101の5位は安定していたが、中位には安定性が見られなかった。従って個体行動力テストとの関連については、個体数が少ないことと、産地による違いがありそうなので、別の群 (小豆島群5頭) でのテスト結果が出てから分析することにした

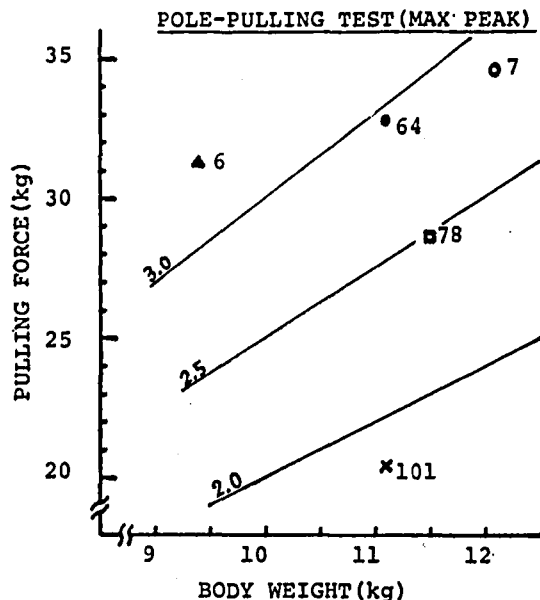


図1 各個体の最大牽引力と体重との関係

JUMPING TEST

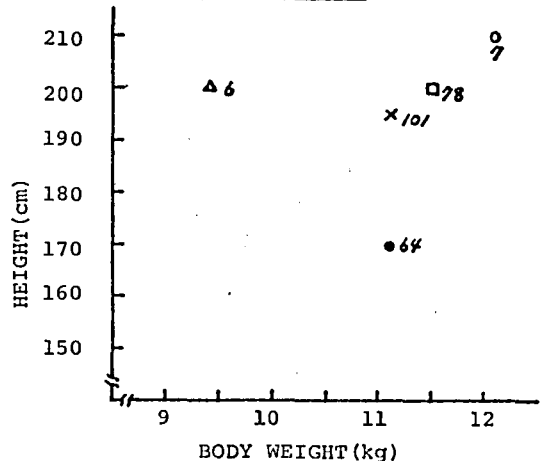


図2 最大跳躍力と体重

(現在、実験は終了し、データ解析中)。

最大牽引及び最大跳躍力はオペラント条件づけ手法を用いて測定した。牽引力は床に対して60度の角度をなすボールを引く力を歪計で検出し、ピーク値等はコンピューターで解析した。各個体の最大索引力と体重との関係を図1に示す。図中の斜線は体重比をあらわす。5頭の平均値は29.54 kg, 母集団の平均値の区間推定値 (95%) は、22.71~36.37kgであった。跳躍力は天井からつるされたイモに飛びつく行動を利用した。このような場面では、全ての被験体が、垂直跳びを行ない (結果は図2に示す)、5頭の最大跳躍力の平均区間推定値は176~214cmであった。

霊長類の弁別学習における興奮過程と抑制過程—反応条件性弁別の吟味—*

小 川 隆 (慶大・心理)

河 嶋 孝 (慶大・心理)

浅野 俊 夫 (霊 長 研)

*ニホンザルのオペラント弁別—予備試験—第31回動物心理学会 (1971)

オペラント条件づけとレスポナント条件づけとの交互作用を弁別の事象で検討する場合次の手続がとられる。

S₁→Rft, S₂→Rft のレスポナント分化 (RD) を行なう前または後に S—R→Rft のオペラント条件づけを確立し、消去試行で S₁, S₂ を呈示すると S₁ で多くの反応が生じ RD がオペラント弁別における S⁰ を形成する。この手続では RD とオペラント条件づけとは時間的に離れて独立に試行されるが、オペラント条件づけで形成された反応が生起の直後に S₁, S₂ をともなう手